



津布久 隆 著
ナタ1本ではじめる「里山林業」
 山採り枝物で稼ぐコツ

発行所：一般社団法人農山漁村文化協会
 〒335-0022 埼玉県戸田市上戸田2-2-2
 2024年11月発行 B5判 144頁 定価2,420円(税込)
 ISBN 978-4-540-24140-6

本書は、里山林の活用術でお馴染みの津布久 隆氏が「山採り枝物」に的をしぼって解説した入門書である。著者の既刊本は、豊富な写真と図解による解説がわかりやすく、いつも楽しく拝読しているが、今回もとても興味深い内容となっている。やはり、実践者の言葉は説得力がありたくましい。淡いグリーンを基調としたカバーには、著者の笑顔あふれる写真と可愛い里山風景のイラストがあり、どこか懐かしさを感じる。ページをめくると、里山林業の魅力や里山林の復活を願う思いが随所に感じられ、親しみやすい語り口も著者ならではの持ち味である。かつて定期的な伐採や下草刈りなどの手入れが継続されてきた里山林は、今では放置され樹木は大きく育ち林内は鬱蒼として暗い藪となつていたりも多し。なんの価値もないと思いきや、実は刈り取った草木は収入になるというから、収穫の喜びと山の管理の一石二鳥というわけだ。140超ページにわたって、現場での採取から出荷までの作業手順や、樹種ごとの魅力、取り扱い上の注意点、山の管理方法や利用できる交付金に至るまで丁寧に解説されている。県で林務を担当された長年の経験と、里山林業の実践者としての知識や技能も満載で、大変読み応えがある。

プロローグでは、まず枝物生産の醍醐味が紹介されている。現在天然枝物は、生け花などに使う花材としても引き合いが多く、大胆な枝物を使ってセンスを競い合う高校生の花

いけバトルでも人気があるという。里山の身近な草木の活用によって、価値がないと思われているものに価値が見出され、里山林の復活や森林保全に繋がってほしいという著者の熱いメッセージが込められている。第1章「里山林業の一年」では、季節ごとにどのような種類の枝物が出荷されているかがカレンダー付きで解説されている。月ごとの単価も掲載されており、採取・販売にあたって高値になる時期が一目でわかり、これから枝物生産をはじめの人にはありがたい情報である。実際に販売されている植物の中には、普段よく目にする物も多数含まれており、正直需要があるとは思ってもよらなかったのが驚きであった。第2章「こんな枝物や植物が売れる」では、実、葉、枝のどのような形態的特徴が人気なのか53種類もの植物について詳しく解説されている。しかも生きている植物だけではない。風情ある流木や枯れ枝は脇役としても需要があるという。枝物生産の楽しさや珍しいエピソードが散りばめられたコラムも楽しい。第3章「里山林業の実際」では、山での作業に必要な装備や、枝の伐り方、水揚げ、結束やラッピングなどの具体的な手順やポイントが写真付きでわかりやすく整理されている。収穫や運搬、出荷に必要な道具類の情報も豊富だ。第4章「いろいろあるぞ天然枝物の売り方」では、卸売市場やインターネット、農産物直売所など各販路の情報が、メリットとデメリットとともに紹介されて

いる。各種手続きについても、出荷登録申込書の例や連絡先なども掲載されており、実際の出荷までのイメージがつかみやすい。最後の第5章「枝物採取のための山づくり」では、枝物が採取できる山づくりについて、利用されなくなった高齢林をどのような手入れによって多種多様な「雑木林」に導くかが解説されている。整枝剪定の仕方や施業を実施するのにかかる経費、有効な交付金の種類についての情報も充実している。この章では、林業の専門用語が多く引用されているが、各ページには注釈があるので安心して読み進めることができる。一般的に、林業はチェーンソーや重機などの特殊な機械を扱うための訓練が必要であるが、本書で紹介されている「里山林業」はナタ1本ではじめることができるのは、初心者にとって大きな魅力であろう。この本を最後まで読み終わったころには、きっと誰もが里山林に足を運んでみたくなるに違いない。適切な森林管理ができてこそ持続的な生産が可能であるのは、里山林も人工林も同じである。かつて人々は、里山林から食料や木材などの資源を調達し、その働きかけが多様な生き物を育み、さらに多様な生活様式や文化などの恵みがもたらされてきた。身近な里山林で自然との触れ合いを楽しみながら森林管理を実践したいというすべての人に、ぜひ備えてほしい一冊である。

[森林総合研究所関西支所/山下直子]